

第 1 部 チャレンジの 4 5 年

NPO 法人日本アビリティーズ協会 会長
伊東弘泰

- 第 1 章 「保障よりもチャンスを！」
- 第 2 章 運動の根底にある少年期の体験
- 第 3 章 学生時代の貴重な体験
- 第 4 章 アビリティーズ運動の始まり
- 第 5 章 障害者による障害者のための会社
- 第 6 章 営業拡大に全力疾走
- 第 7 章 ハンセン病の人々と鈴木智子さん
- 第 8 章 労働大臣に面会
- 第 9 章 福祉機器事業の創業
- 第 10 章 商品開発の第一号は食器
- 第 11 章 海外メーカーとの提携
- 第 12 章 各地の拠点づくり
- 第 13 章 ブックセンター『スクラム』の开店
- 第 14 章 “旅、”で人生が変わる
- 第 15 章 ライフサポートプログラムの始まり
- 第 16 章 施設サービス事業の創業
- 第 17 章 障害者差別禁止法の制定をめざして
- 第 18 章 これからのアビリティーズ活動

第13章 「ブックセンター『スクラム』の开店」

●小売業に障害者の雇用を

一九八三（昭和五八）年四月二九日、宮城県泉市（現仙台市泉区）の上空に、「ブックセンター『スクラム』开店、どうぞよろしく」という大きなアドバルーンが、朝早くからいくつもポツカリと浮かんでいた。日本アビリティーズ社とスーパー大手のジャスコ株式会社（現、イオン）が提携して、三年八か月をかけて準備してきた、わが国初の重度障害者が働くモデルストアの开店である。

かねてから、心身に障害のある人たちが主体となって運営するモデル的なストアを是非ともつくりたいと考えていた。というのは、百貨店やスーパー等小売業界は、当時障害者雇用が最も遅れていた業種のひとつであった。また雇用されていても、たいていは電話交換手や事務部門など、目立たない裏方に配置されていた。障害のある人が販売の前線に配置されていなかった。

一九八一（昭和五六）年の国際障害者年のテーマ『完全参加と平等』が示す通り、障害のある人もない人も、共に生活できる社会のあり方が、「正常」であると考えられるようになってきたが、その頃の障害者雇用の状況は違っていた。とくに「販売」等の接客業務では障害のある人たちが配置されることなど考えられていなかった。

それまでもモデルストアの構想をいくつかの百貨店、スーパーの経営者の方々に話したが、誰もそんな話にのってくれることもなく、具体化できずにいた。

当時、海外でも小売業界での重度障害者雇用は進んでいなかった。



スクラム1号店外観（1983年）

●ジャスコの協力で具体化

一九七九（昭和五四）年に雇用促進事業団（当時）から委託を受けて、日本アビリティーズ社は一般企業への就職につなぐために、障害者への職業訓練を行なうアビリティーズビジネススクールという事業を行なった。四か月間、集中的に訓練し職業安定所の協力も得て、就職させる新しい就労促進システム実験事業であった。修了生のひとりが当時のジャスコさんに採用されることになった。それがご縁で同年十月、岡田卓也社長（現名誉会長）にお目にかかった。初対面の岡田社長に、モデルストア構想をお話ししたところ、

「それは大変意義のある話ですね。できることならやりましょう。応援します」と賛意をいただいた。

この「できることなら」という言葉は、私のアイデアが現実的に「成り立つ」ことの確認を求められた、と思った。

翌十一月に当時ジャスコ常務であった植田平八氏（のち副社長）を委員長に、ジャスコとアビリティーズの両社によるプロジェクトチームを発足させた。アビリティーズ側の主要メンバーとしては私のほかに、車いすの弁護士として著名でアビリティーズ運動をついに先年まで共にやっていた村田稔氏も入り、両社で八名ほどの体制でスタートした。

チームは、ジャスコの大型店等を視察、重度の障害のある人たちが働ける売場はどこか、問題点は何か、といったことを入念に調査してまわった。ジャスコの神奈川・大和店や千葉・稲毛店といった大型店の商品搬入口に真冬の早朝五時頃から立ち、時間の経過とともに、トラックで運ばれてくる商品がどんなものか、詳しく調べた。厚く着込んでも足下からくるしんしんとした寒さになんとか耐えながら、調べていった。

また、日本アビリティーズ協会の会員の人たちにも協力していただき、さまざまな売場で商品を扱う実験を行なった。協力してくれたのは車いすや松葉杖、装具等さまざまな補装具を使用していた人たちだった。こうした売場での作業実験は、その後の計画づくりにとても有効だった。どんな売場でどういう商品なら扱えるか、働くことができるかを明らかにしていった。

●新会社設立、立地探し

書籍やカセットテープ、レコード等のサウンド商品は、障害のある人たちにとって最も問題が少ないもののひとつだということがわかってきた。他の商品グループでも有効と思われるものがいろいろあった。

取扱う商品が予定されたあと、小売店としての基本コンセプトを固めた。私の狙いは次のような点であった。

- ①我々の店は特定の商品群に限定し、専門店として営業する。
- ②その地域で規模において有数の店であること、できれば地域一番店であること。
- ③障害者が働いているからといって慈善的、福祉的な雰囲気ではなく、優れた商品とサービスを求めて市民が買い物に来てくださる「普通」の店であること。
- ④からだになんらかの障害のある店員でも、仕事をするには、支障のない設計の店であり、またお客様にとっても便利であること。

等であった。

プロジェクトチームによる調査、検討は仔細に行なわれた。「これはできる」と確信を深めていった。ジャスコの植田さんは、前向きで、プロジェクトがうまく進むようジャスコの社内にも協力するよう、いつも指令を出してくれた。氏は我々と同じ考えであり、すべてにおいて積極的であった。

プロジェクトチームが動き出して一年後、確信に満ちた結論をまとめた。岡田社長の承認もいただき、両社の共同出資によるアビリティーズジャスコ株式会社を設立することになった。一九八〇（昭和五五）年十二月のことである。岡田社長にお会いして、一年三か月後であった。

それからは店舗の立地探しのため東奔西走が始まった。民間のデベロッパーへのコンタクトはもちろん、スタッフは連日、幹線道路を車で走って、これはと思う土地をみれば地主を訪ねた。東京、埼玉、神奈川、千葉、栃木県など各自自治体の障害者雇用担当課を訪ね、公有地の借用の可能性も打診した。しかし、お役人は「障害者が大型専門店をやる」という計画を聞いて、そんな計画が実現するとは思えなかったようだ。

土地探しに明け暮れて一年、物件はいろいろあったがいずれも決定にいたらなかった。計画と現実のギャップの大きさは想像以上だった。

●岡田会長の配慮で仙台へ

具体的な土地の当てがなく、虚しい活動の間、労働省の障害者雇用担当課を時折訪ね、状況報告は欠かさなかった。気落ちしている我々を、当時の若林之矩課長（のちに事務次官）はいつも激励してくださった。我々の店づくりの考えに最初から共鳴し、協力的だった。氏は、一九七一年（昭和四六）年に私が原健三郎労働大臣をお訪ねしたときにお目にかかったのが最初だった。

挫折の念が強くなっていたとき、岡田社長から、宮城県泉市（現仙台市）のジャスコの遊休地を使ったらどうか、との提案をいただいた。このプロジェクトを気にかけてくださっていたのだ。

泉市はのちに仙台市と合併するが、当時ベッドタウンとして開発が急速に進んでいて人口が急増していた。当該地は、福島と盛岡をつなぐ四号バイパスに面していた。十年前前に営業を停止した三十レーンのボウリング場が朽ち果てるように建っていた。屋根は一部はがれ、雨に打たれたレーンの板は大きくめくれあがっていた。駐車場のスペースも広がった。

このプロジェクトのためジャスコから派遣されていた古沢準一君は早速、市内のホテルに泊まり込み、ジャスコの開発部門の協力も得て数日かけて詳細に商圈調査を行なった。彼から来る日々の電話での報告はこれまでにない明るいものだった。我々は元気を取り戻した。長い船旅の果てに一つの孤島を見出したような気持ちだった。

●書店組合の猛烈な反対

この旧ボウリング場の跡地は、私たちの計画にぴったりであった。それまで候補地を求めて関東一円を走り回っていたのだが、一転、第一号店開設を仙台に決め、具体的な開設計画に入った。

建物の一部をジャスコさんから買い取り、さらに増改築して書籍、テープ、ビデオ等の売場とし、ボウリング場の六レーン分をゲームコーナーとすることになった。残った二四レーン分はジャスコさんが地元の会社に貸し、ボウリング場を再開、当方のブックセンター、ゲームコーナーと一緒に営業開始することとなった。

総工費一億八千万円のうち一億円については、日本障害者雇用促進協会（当時）による助成が決定した。しかしこの助成を受けるためには、地元業界から私たちの店の開設について、同意書を得ることが条件となっていた。

当時の泉市商工会で説明会を開いたところ、地元書店組合から猛烈な反対を喰らうことになった。当時、東北新幹線はまだ開通しておらず、村田稔弁護士、古沢準一君そして私の三人は、毎週のように車で東京・仙台間を日帰りで行き来することが始まった。その後数十回も仙台に通うことになった。

早朝四時、渋谷のアビリティーズ本社を出発、東北高速道をひたすら走り、宮城県庁に九時に到着する。県庁舎は昔からの古めかしい建物でエレベーターがなく、長い階段を車いすの村田先生と杖の私は苦労して上がらねばならなかった。障害者雇用の所管課にあいさつをしたのち、書店組合との団体交渉に臨んだり、各書店を回ったりした。それが夜遅くまでになるのは珍しくなく、東京に戻るのはいつも深夜の十二時、一時だった。

書店組合との話し合いは一九八二（昭和五七）年の早春から始まった。皆さんは我々に、次々と厳しい言葉を投げかけた。

「障害者が店をやるなんてできるわけがない。じきにつぶれて、そのあとジャスコが出てくるのだろう。ジャスコの身代わり出店に違いない」

「我々がやったって本屋は大変なんだ。障害者にやれるわけがない。」

「障害者は福祉手当や障害年金を貰ってるだろう。我々だってボランティアで年に一回はドライブ旅行などで応援している。こっちの商売まで邪魔しないでくれ」

これらの意見に対し、私たちはひたすら丁寧に頭を下げ、丁寧に説明を繰り返し、お願いをし続けた。

「障害者もあたりまえに仕事につきたいのです。できることなら皆さんの援助に頼らず仕事をし、自分で給料を得て、生活したいのです。税金で養われるのではなく、納税者の立場に立ちたいのです」

私たちは一步も譲らず、自立をめざすアビリティーズの哲学をもとに語り続けた。書店組合との団体交渉だけでなく、各書店を訪ねてお願いしてまわった。個別訪問でも相当なことを言われたが、そのうちビールを出してくれるような人も出てきた。しかし、個人的には多少変わっても、団体交渉では書店組合、泉市商工会は強硬な姿勢をとり続けた。

秋を過ぎ、冬が到来した。地元書店組合との話し合いはなんと十か月にもわたり、その間、我々は頭を下げっぱなしだった。その年も終わりに近づいた十二月半ば、宮城県の担当課から、「地元業界の同意書がなくても建設計画を進めて良い」と、突然電話があった。

当時、県の担当所管である商工労働部は書店組合、商工会などの強い反対をみて、立場上だろうが、中立的な姿勢を貫き、決して我々に好意的ではなかった。反対のために計画が頓挫するかもしれないことを懸念して、労働省が県に働きかけてくださったに違いなかった。

結局、地元業界の同意書のないまま、店舗建設が始まることになった。当時は、障害者が当たり前働くことについて、市民や産業界の合意形成を得るために、このような不合理な対応を私たち自身がしなければならぬ時代であった。

● ついにオープン

一九八三（昭和五八）年四月二十九日。ブックセンター「スクラム」の開店当日は、朝からいつ降り出すかわからないような天気だった。ところが十時の開店前に二、三百人もの人たちが列をなして待っていてくださった。そして扉が開くと同時にたくさんの方が押しあいへし合いして入ってきて、店内はたちまちいっぱいになっていた。

書店組合の反対で長い間着工できずにいた事情をよくご存知の方も多く、みなさんが開店を祝ってくださった。たくさんの方が「開店おめでとう」と言ってくださった。嬉しかった。子供たちも何のためらいもなく商品を手に取り、レジや売場の車いすの障害のある店員たちと違和感なくやりとりしている。そんな光景が繰り広げられた。

書店組合の反対を受け、立ち往生をしていた頃、ジャスコの植田平八さんは、

「このように反対を受けた店は大丈夫。反対が強い店ほど開店すればうまくいきます」と私たちに励ましてくれた。

目途さえ立たずにいた頃、NHK仙台放送局は三十分もの特別番組を放送してくれた。私たちの考えや事業の計画、そして書店組合側の意見など、客観的に報道した。また開店直後にも取材に来られ、再び三十分番組にまとめて放送してくれた。

その時のアナウンサーは、のちに「NHKのど自慢」の司会を担当した宮川泰夫さんだった。義憤もあらわに取材をされ、書店組合との話し合いの場では、双方の考えの違いを鮮明にした。

一方、地元の最有力紙は非常に冷たく、論調は完全に書店組合側で、残念ながら障害者雇用に全く無理解だった。紙面から社会正義を感じられなかった。しかし報道のあり方に違いはあっても、こうしたマスコミのお蔭で、地元の方々は事情をよく知っていて、開店を心待ちにしてくださったのだ。

「スクラム」という店名は、プロジェクトチームの一員としてずっと苦勞を共にしてくれた古沢準一君の提案



スクラム店内（1983年）

であった。障害のある人もない人も共にスクラムを組んで働こう、という想いを込めたすばらしい名前だった。彼は考えぬいた揚句、仙台から私に電話をくれ、

「すごくピッタリの店名を思いつきました」

とはずんだ声で伝えてきた。

スクラム一号店は重度の障害者十名、パート社員五名、それに健常者の社員三名、あわせて十八名で開店した。売場面積五百平方メートル、それにゲームコーナー。駐車場は百二十台分もある、当時ではまだ珍しい本格的な郊外型ブックセンターであった。

十か月間もの書店組合との話し合いの最中、内定者からひとりの辞退もなく、自宅で決着を待ち続けてくれた。またジャスコの方々には、店員としてズブの素人の彼らを、包装の仕方、レジの取扱い、商品管理、それに挨拶の仕方まで熱心に教育して下さった。なにしろ初めの頃、「いらっしやいませ」、「ありがとうございました」などという当たり前の言葉が出てこず、皆、口の中でモグモグ言っていたのだ。



スクラム開店10周年記念（1993年6月）

●二号店も開店

スクラムはお客様に支えられ順調に発展した。一年目の売上は約二億円。そして二年目は三億円を達成、早くも書籍だけで利益を計上、納税もできるようになった。数年後には十億円の売上を達成、親会社のジャスコと日本アビリティーズ社に株式配当を支払うまでになった。重度障害者が中心になって働くモデル店舗は、岡田社長の賛同とジャスコの皆さんの協力を得て見事に成功した。

ところで、このプロジェクトを始めてから開店までの三年八か月の間、私はこの店づくりのため、本業を相当犠牲にしていた。開店までの約四年間、日本アビリティーズ社の売上は停滞し、利益も大幅に減少した。アビリティーズ社にとって、スクラムを産み出すまでの代償は極めて大きかった。

しかし、これをご縁に、岡田社長はアビリティーズ運動の強力な後援者となって下さった。ジャスコ（現、イオン）は日本アビリティーズ社の三番目の大株主として、今も私たちの事業にご協力くださっている。

一九八三（昭和五八）年の一号店開設以来二八年間、今に至るまで、北海道や東北各地にも開設したが、決して順調に來たわけではない。現在東北に七店舗を有するが、兵庫県香寺の郊外型店舗、札幌のインストアなどのように、大きな投資をして開店したものの計

画通りには進まず、撤退することになったものもある。

現イオンの障害者雇用特例子会社として設立したアビリティーズジャスコ株式会社は、創業の頃から約十年間、私が社長を務めていた。しかし、アビリティーズ運動の拡充のため、多忙を極めるようになったことから、その後はイオンさんから社長を出していただくことをお願いし、私は取締役相談役となった。今も双方から役員を出して経営に当たっているが通常業務はほとんどイオンさんに依存している。小売業界は厳しい競争が続き、経営は容易ではない。しかし第一号店に入社した障害者の人たちは、今では、取締役、店長など幹部社員として活躍している。彼らはアビリティーズの精神を心底に帯している。

障害のある人たちが中心となって運営する本格的な専門店「スクラム」は小売業界の重度障害者雇用のモデル店舗として成功したが、いまだ同様の本格的な店舗は他にはできていない。小売業界での障害者雇用は残念ながらあまり進んでいないようだ。

アビリティーズ運動は創立以来、「保障よりも働くチャンス」をスローガンに重度の障害のある人たちが職業能力を発揮できる場面づくりをしてきた。たとえ心身に障害があっても差別や隔離されることなく、たった一回きりの人生のシナリオを自らで描き、演じたのである。

第 14 章 「旅、で人生が変わる」

●旅は最高のリハビリ

一九七二（昭和四七）年の初夏、身体に障害のある二十代の若い人たち十五人と、特に障害はないが、障害者と何らかの関係のある分野で仕事をしている人たち五人の、合わせて二十人でアメリカ、カナダ、そしてハワイも含めて三週間に及ぶ海外ツアーを行なった。日本アビリティーズ協会が行なった最初の、障害のある人たちの海外ツアーであった。

以来、少ないときでも年に二～三回、毎年五回くらいの海外への旅と、北海道や関西、沖縄等の国内旅行を毎年行なってきた。またこれに加えて、日帰りツアーもひんぱんになり、高齢者、障害者のツアー、お出かけプログラムは、あわせると一年に四、五十回行なわれている。

一九八八（昭和六三）年からは、いま、茨城県立健康プラザの管理者をしておられる大田仁史先生や、新潟のゆきぐに大和総合病院院長であった斉藤芳雄先生に協力していただき、障害のある人、半身麻痺、リウマチ等、様々な障害のある高齢者の「旅」を企画し実施してきた。通院以外は自宅にこもりきりで、旅行などとても考えたことのない人たちを、段階的に外に連れ出し、ついには海外旅行にまで行かせてしまうのである。旅行にしる近くへの外出にしる、初期の段階で失敗することは、絶対に避けなければならない。

とにかく旅行に行ってみようか、自分に行けるだろうか、と思った人が、その最初の旅

行で無事に行け、楽しく過ごせることが大事だ。そのため、安全に旅行ができることを確認してもらえるように、沖縄本島南部に「リゾートアイランドビュー」という完全バリアフリーの、小さな、しかし結構しっかりと装備したホテルを、アビリティーズが建設してしまった。一九八九（平成元）年四月のことである。沖縄旅行の体験をした人は十三年間で二千五百人を超えた。それで自信をつけて海外ツアーに行くことになった人、それも一度ならず、三度、四度という人がざらにいるのである。

この喜びは本人だけではない。むしろ、配偶者はじめご家族が共に旅を楽しむことが大切だ。倒れて麻痺のある身体で、

「まさか一緒に旅行に行けるとは」と、驚かれる。それまではたいていの場合、思いもよらないことだったのである。それが実現し、「行けた」という自信は、その後の人生を大きく変えてしまう。



南国のきらめく空と、透き通った海の青にも感嘆。タイ・エメラルド寺院にて
(2003年5月)

●遠足にも行けなかった子供時代

アビリティーズの旅行プログラムは、私自身の体験を通して始まった大きなチャレンジであった。

私は一歳でポリオになり、最初は両脚が麻痺して歩くことができなかったが、母の、祈りと粘り強い医者通いで、奇跡的に左脚が回復し、障害は右脚だけにとどまった。しかし、友だちと同じペースで歩くことなどとてもできず、小学校に入る頃には一緒に遊んでくれる仲間は少なくなっていた。

皆が楽しみにしていた遠足には、小学校から高校までの十二年間に、合わせて四回しか行けなかった。遠足前後は、クラスの仲間たちの話に入っていけなかった。ディズニーランドやテーマパークもなく、テレビもない時代、そしていずれの親たちも忙しく働いていた。戦後の復興の真っ只中で皆ようやく生きていた時代である。学校の遠足は子どもたちにとり、楽しい一大イベントであった。しかし、私にとってそれはたいへん淋しい思い出であった。

そんな経験をもつ私も、アビリティーズの組織をつくり、アメリカに行く機会があった。

私自身が旅行の経験に乏しく、身体の障害もあり、躊躇があった。また当時、自分の英語が通じる自信などなかった。自分の移動もなかなか困難であったが、最初の海外旅行で二二日間十都市を回るといふ、私にとっては生まれて初めての冒険をした。

これは私のそれまでの世界観を変えることになった。そして、旅行の楽しさも初めて知

ることにもなった。過去の体験をはるかに超え、知らない世界、人々、生活、社会があることを見たり感じることができた。それまで旅行に行くことができなかった自分の、限られた体験で物事を見、考えていたが、それはなんと狭い、ちっぽけなことだったかと思っただけのものである。

しかし、心身に障害のある人は、たいていみんなそうだった。海外どころではない。隣り街すら知らない人も多い。

「障害があって、いろいろなことを体験できないでいる人たちにこそ、旅行が必要だ。その機会をつくろう」

障害のある人たちの旅行に関する情報を集め、観光と施設等の見学先を固める等、入念に準備を進めた。

●初めての車いすツアー

一年後にこの最初のツアーは行なわれたが、決して楽な旅ではなかった。最も困ったのは、一緒に行った障害のない人たちから出た不満だった。出発前に旅行の趣旨を理解してもらっていたはずであったが、日程ちょうど半ばの十日が過ぎた頃、ほぼ全員から、「自分たちも旅行費用を払って参加している。しかし、移動に時間もかかり、車いすを押すことを手伝ったりで、フリータイムでも自由な行動ができない。悪いけどこれから先、自分はグループと別行動で旅をしたい。帰りは合流するから」と言われたのである。

確かに、かなりの介助の協力をしてもらっていた。しかし、それは出発前に了解してもらっていたはずだった。でも、それが十日も続くと、やはり我慢ならないことになったのであった。困ったことになった。一人でも別行動になると、観光先や空港等で、車いすの移動、介助に支障をきたすことは明白だった。それでは夕食後に話し合うことにしようと、その場はおさめ、ゆっくりとおいしい食事を終えた後、私の部屋に集まってもらい、そのメンバーと話し合うことにした。

ビールやウイスキー等をふんだんに部屋に持ち込み、まあ飲みながらと、ベッドにあぐらをかいて、話し合いを始めた。夜中までいろいろなことを語り合った。その結果、皆さんよくわかってくれた。疲れとストレスからきていたのだ。親切な気持ちを皆もっているのだが、やはりせっかく来た海外旅行で、思いのままに行動できない、たまには自分の好きな食事を好きなところで勝手に食べたくても、それもできない状況では、誰も我慢ならないことになるのは当然だった。

この悶着はいい経験だった。ボランティアの限界を知った。その後、今にいたる多くのツアーのためにもいいヒントを与えてくれた。つまり、長い旅行で善意をあてにして、障害ある人の介助などは考えるべきではなかったのだ。

この経験から、その後のツアーでは、同行する家族さえも介助の役割、負担から解放することの必要性を学んだ。ご主人や奥様の介助を「他人に絶対に任せられない」と思い込

んで参加される家族も多い。しかし、だいたい旅の途中から、そんなことを忘れて人任せにし、夜どこかへ出かけてしまうくらいの家族も出てくる。つまり家族も解放してやるのがとても大事なのだ。そんなわけで、アビリティーズのツアーでは、いろいろな介助スタッフがかなりの人数で同行して、濃厚な態勢で行なうのである。

●沖繩にテスト旅行

その後数年間、アメリカ、ヨーロッパ、ハワイ、アジア等、日本アビリティーズ協会がごく一般的な地域の海外旅行を行なっているうちに、参加メンバーは次第に変化していた。当初はどちらかといえば若い人たちが参加していたのに、次第に、脳卒中等の中途障害の方の参加が目立ってきたのである。

「かつて商社に勤めていた。アメリカにもう一回行ってみたい」

「ドイツに娘が嫁いでいるので、孫たちに会いたい」

「一度は戦争当時の思い出の地に行きたかった」

と、いろいろな思いをもっている方々だった。それは次第に人数が多くなり、しかも重度の状態の人が結構多くなってきた。

中には、普段かかっている医者から、

「大事をとって行かないほうがいい」

と言われたのだが、

「死んでもいいからぜひ行きたい」

と言う人も現れた。こちらも少しずつ心配が募ってきた。旅行中に脳卒中等を再発されでもしたらと考えると、うかつに

「行きましょう」

と言うわけにもいかない。私の周辺の医師にも、

「脳卒中の麻痺のある人を海外に行かせるなんてとんでもない」

と言う人もいたのだから。

確かに、何が起こるか分からないような冒険的な旅行を行なうことが危険なことは間違いない。事故や重大な事態を旅行中に起こすことは、絶対に避けなければならない。

そこで、中途障害の人も含めて重篤な障害のある人を対象に、もう少し短期間の旅行、短い時間のフライトで気軽に、体験旅行、お試し旅行をしてもらうことを考え始めた。「さてどこがいいか」と長い間探したが、結論として国内でも文化が異なり、エキゾチックな雰囲気もある沖繩にそのシステムをつくる計画を真剣に進めてみたらどうかということになった。一月の冬に桜が咲くという暖かさもよかった。

ちょうどその頃、沖繩本島南部に特別養護老人ホームをつくる応援を頼まれた。それとあわせて小型のホテルを設置する構想でその実現性は高まった。敷地の取得からアビリティーズがプロジェクトを進めることになった。歴史的にも由緒があり、景勝地だった。さ

んご礁の美しい海が一望できる丘の上に二千三百坪の土地を取得することになった。ひとまず特養ホームに土地の一部を寄付し、そちらは建築が始まったものの、旅行用の滞在施設をつくるかどうかについては、迷いに迷って一年が経過した。

昔からアビリティーズの活動の協力者だった大田仁史先生と斉藤芳雄先生に相談しながらも、ホテルを建てる大きい投資までしての計画を決断することができずにいた。そして、実験的に参加者を募集して沖縄ツアーを催行することになったのである。

一九八八年（昭和六三年）八月、まず第一回として大田仁史先生を団長とし、多くは高齢の中途障害のある方々三十数名が参加して、沖縄北部・恩名村と、那覇市の高級リゾートホテルを利用して三泊四日で行なった。いくら素晴らしいホテルでも普通のバスルームを使っての入浴やトイレはやはり大変なことだった。観光コースもバリアだらけ。そして観光バスは普通の車両なので、車床が高く、乗降するには介助者が抱え上げるしかなかった。

大田先生が、参加者一人ずつの介助の仕方を、ボランティアで参加した琉球大学の学生さんたちにことこまかく指導してくださって、一日目、二日目と進んでいった。大田先生も見かねておぶったりする場面も多く、このツアーの後、長い間、ひどい痛みで悩まされることになってしまった。

ところが三日目くらいに、それまですべて介助に頼っていた人が、バスの椅子につかまって、狭い車内をそろりそろりと歩き出す場面がみられるようになった。羽田での出発のときには緊張で顔が引きつっていたのに、顔の麻痺がわからなくなるくらい、明るく大笑いするような人も出てきた。

●大田仁史先生の名言

翌日は東京に帰るという前の晩、夕食会で大田先生の素晴らしいお話があった。その中で、

「旅は最高、最大のリハビリですね」

と言われた。今、その言葉だけが独り歩きして、先生の意味するところもわからずに、大手の旅行社の宣伝文句にも使われているが、本当は実に意味のある言葉なのだ。先生のそのときの話は、今も私の耳に明確に残っている。

「病院でADL等の訓練を受けてきても、わが家に帰ると次第に家族の介助に頼りがちになってしまうのが普通。旅行に出ると、病院で訓練を受けたADLを自分で久しぶりにやることになる。出発の時間に間に合わないとホテルにおいていかれてしまうかもしれない。起きたら、トイレ、洗面、着替え、そして食事、限られた時間



沖縄ではバスの乗降はすべてマンパワーで対応した。写真上は大田仁史先生。

で全部やって出かけないといけない。それを数日間にせよやる。旅行という非日常の世界で、楽しいこと、珍しいことがいろいろある。そこで心が動く。心が動くと身体も動いてくる。旅はすごいリハビリなんだと、皆さんを見ていて本当に思いました。」

そして実験第二回目は齊藤芳雄先生を団長に、同じようなコースで、二五名ほどの参加者により行なわれた。ホテルもバスも観光地も問題は同じだった。那覇では齊藤先生を囲んで、障害のある人たちが一緒に有名な歓楽街の夜へと車いすで繰り出した。筋ジストロフィーの障害のある新潟県南魚沼市の上村ヤスノさんは、カラオケスナックで歌ったのは生まれて初めてだったというが、その美声と歌唱力に一同魅了された。彼女にとってこのときの体験は忘れることのできない思い出になったようだ。

また、ホテルでの夕食のときに、六十代後半のご夫婦が泣いておられた。企業戦士として会社で無理に無理を重ねて働き通してきたご主人は、退職後、奥様と一緒に旅行する予定を立てていたようだ。それが退職の直前に倒れ、その計画はなくなってしまった。無念のうちに療養生活を送り、少しずつよくなってきたものの、車いすなしでは生活できない状態だった。それがこうして、沖縄に来られることになり、「夢のようだ」と感激していたのだ。思わず、私たちももらい泣きしてしまった。

●沖縄にホテルを建てる

この二回の実験の旅で、たくさんの感激をいただき、沖縄に総工費三億円をかけてホテルを建てることを決心した。地域は無医村だったこともあり、地元の仲里常延村長さんからも要請され、一階に診療所も開設した。医者は東京から招聘した。二階は九室の客室とダイニングルームそしてロビーの、小さなホテルだ。客室は車いすで十分に動ける広い部屋で、重度の障害のある人でもできるだけ自立して使えるトイレと浴室を備えた。デザインのよいフランス・ルノー社製の十人乗りミニバスを輸入し、車いす利用のための折りたたみ式のスロープを架装した。これで島内の観光も自由にできる体制を整えられた。



客室内



リゾートアイランドビュー（1989年）

毎年冬に定期的に長期滞在する人もあり、また知的障害の養護学校の生徒さんたちが毎年の修学旅行で利用されたりと、さまざまだった。

日本アビリティーズ協会の毎月のグループツアーでは、障害をもってから初めての旅行の体験を通して、ご自分の身体が旅行に耐えられるかどうかの確認ができる。ここで自信をつけて、次は海外へと夢を膨らませて、実際にその後世界中に幾度となく旅をしている人も多い。病気や障害で一度は挫折しても、沖縄旅行がきっかけとなって、再び、人生を羽ばたくように復活させることができたのである。

その後、お亡くなりになった方のご遺族から、「沖縄へ旅行ができてからすっかり変わりました。また海外に行きたいと積極的に訓練をしたり自分で旅行先を事前に調べたり、生きがいを得ました。病気になったけれど、いい人生だったと感謝していました」などというお話をよく聞いた。

建築して十三年をもって、リゾートアイランドビューは売却することになった。沖縄だけ旅行できるようなシステムはむしろ良いことではなく、全国各地に旅行、滞在できることを可能にするべきであること、そしてJDA（障害者差別禁止法）の制定実現に向かって、国内の観光地もまた変えていくことの運動を進めるべきであった。

●計画的にステップアップ

アビリティーズのツアープログラムは、最初は日帰りのプログラムから始まる。日本アビリティーズ協会の「お出かけ協力隊」の移送車で自宅までお迎えをし、日帰りでピクニックや演奏会に出かける。次は三泊程度の国内旅行、それも北海道や、京都観光。そして、いよいよ海外ツアーである。長野厚生連鹿教湯病院の協力による一週間のリハビリドックでは、屋外のリハビリプログラムで美しい信州を楽しむこともできた。

協会は介助等の協力者の「旅たびパートナー」というボランティア組織を編成している。本業は看護師さんやセラピスト、ヘルパーさん等で、職種はさまざま。パートナーにも参加者と一緒にはっきり楽しんでもらう。

海外のような長い旅に参加するまでには、何度か日帰りの催しや国内旅行の介助や添乗で、研修してもらおう。単に介助技術の提供だけではなく、アビリティーズの哲学を学んでいただくプログラムがここにもある。こうして介助スタッフの養成を拡大している。

最近では、協会事務局だけではなく、障害のある会員や旅たびパートナーが中心になって、旅行内容を企画し催行する方向に向かっている。旅行体験がついてくると、今度はさらに楽しみをご自分たちで作り上げていただく。そうはいつでも、海外へのツアーの場合は、旅行社のノウハウの活用も重要だ。しかし、それもほどほどしか信用できない場合が多い。大丈夫だと聞いていたのに、行ってみたらホテルのレストランの出入口に実は段差があった、部屋のバスルームが車いすでは使えなかった、などというのはさらに起きる。

初めての旅行先については、アビリティーズの海外提携先がそうした最新情報を調べ上

げ、場合によっては現地の確認にまで動いてくれることもある。スペインの地中海沿いにバスで上がってきて南フランスのトルーズでパリへの新幹線に乗り換えるには、どこの駅なら安全で都合がよい、何分停車している、といった情報を現地の提携先が調べてきてくれた。

二〇〇四年の十一月後半～十二月初めにかけて、十五名の方と五名の介助者がカリブ海のクルージングツアーを行なった。成田からマイアミに飛び一泊して乗船、四島を巡りながら船中に七泊、帰路ではニューオーリンズに二泊して本場のジャズを楽しんできた。世界第二の大型客船での豪華な船旅だったが、日本と違い、船の中はバリアフリーであることはもちろん、毎日素晴らしい催しがあって皆さん満喫したそうだ。

遠足になかなか行けなかった私だが、高校三年の春の修学旅行に行くことができた。当時お決まりの京都、奈良、大阪であった。それまで中学、高校と一度も行くことのなかった私が、なぜ行くことになったのか、とにかく何となく行けそうな雰囲気が私の周りにできていた。数年ほど前の久しぶりのクラス会で恩師から初めて聞かされた。「クラスの皆が、何としても修学旅行に伊東を連れて行きたい、と職員室に来て話し合った」そうだ。五十年も前のことを初めて知ることができ、私はクラスの仲間の友情に感動し、涙してしまった。

しかし今もなお、誰でも障害を負えば、多くの場合、旅行はもちろん街に気楽に外出さえもできないような社会の環境、物理的な困難さがそこら中に存在している。たまたま、介助や、特別な配慮、あるいは友情といったようなことがあって初めて、移動やお出かけ、旅行ができるようなそういう社会であってはならない。たとえどんなに重度の障害があろうと、その人の一生は一回きりであり、やり直しはきかないのである。誰もが同じように素晴らしい人生の体験と喜びを享受できる、そういう世の中をつくることこそ大切である。

車いすに乗っていようと、どんな障害があろうと、行きたいと思えば、どこにでも行ける、家族や友人たちと一緒に旅行を楽しめる社会に変えねばならない。

世界の五十か国以上ですでに成立したといわれる障害者差別禁止法（JDA）を、わが国においても一日も早く実現し、誰もが良い人生を確保できる社会をつくり、誰もが素晴らしい人生を送れるようにしたいものである。今、JDAの制定こそ社会を変えるために必要なのだ。

第15章 「ライフサポートプログラムの始まり」

● 「解決」までご協力

アビリティーズの「福祉・医療相談室」は、月～金曜日、朝十時から夜八時まで会員とそのご家族からの相談を電話で受けている。相談員は保健師、看護師、ソーシャルワーカー

一等で、必要に応じ、専門各科のドクターのバックアップをいただいている。

一度電話を受け、対応して終わりではなく、「問題解決型相談対応」をめざしている。「解決」にいたるまで二、三日から一、二週間はかかる。その間、相談員はご相談のあった方はもちろん、病院その他の関係先と何度も連絡を取りながら問題解決を図っていく。こうした対応に協力してくれている医療機関、福祉施設がいまや全国で四百を超える。外来、入院、ショートステイ、リハビリドック等、各機関の機能を活用しながら相談当事者の「問題解決」を図っている。

●保険会社の協力のもとに

この相談室は一九九〇（平成二）年に活動を開始した。その前年、日本アビリティーズ協会の会員のための「相談事業」を知って、T 損害保険会社の市場開発課長、下斗米寛泰さん（当時）から、

「その相談事業を損害保険会社の民間介護費用保険の契約者に使わせてもらいたい」と依頼があった。

そこで、協会会員向けの相談事業を幅広く対応できるように再構築してできあがったのが「ライフサポートプログラム」である。

氏はアビリティーズのこのサービスを自社の契約者に限定せず、業界他社にも呼びかけた。そして、計六社が利用されることになった。六社の介護費用保険加入者はアビリティーズのライフサポート団体会員として、加入者からの相談事項が各社の相談室を経由して、アビリティーズの相談センターに電話で転送されてくるサービスが始まった。

相談室長は、埼玉県戸田市の保健課長を最後に退職された、保健師の太田口ナカエ氏である。

当初は協力医療機関ネットワークをつくりながら、対応していくという手探りの出発であった。

ありがたいことに、アビリティーズ運動の共鳴者、協力者、そして日本アビリティーズ社のお客様など、各地の福祉施設、病院等が協力機関として次第に参加して下さるようになった。

●多くの団体会員を得て

この事業が始まって間もなく、今度は日産労連様にも同組合員の方々に利用していただくことになった。日産労連は日産自動車及び関連会社の従業員労働組合で、アビリティーズ運動の強力な後援組織として創立間もない頃から、支援してくださっていた。日産労連が団体会員として加入くださったことにより、一挙に二四万人の方々が新たな対象となり「ライフサポートプログラム」は拡大した。

次いでソニー健康保険組合様、イオンのグッドライフクラブ様、日立製作所健康保険組

合様もご加入下さった。ライフサポート会員は団体、個人会員あわせて、四十万世帯に達することになった。

●段階に応じた対応を

相談室に寄せられる内容はさまざまだ。ある年のデータによると「医療、健康」に関することが全体の三二%を占めるが、本人や家族の気にかかる健康上のことから末期ガンなどターミナルの相談も多い。最近では、今かかっている医療機関や医師の判断や治療方法、対応について疑問をもち、その確認の相談も増えている。セカンド・オピニオンである。

次いで多いのが入院、転院先の紹介、福祉施設利用の相談で、年々増え、二一%に達している。入院期間が短縮化され、以前なら病院から次の転院先の紹介を得られたが、今では患者さんが自分で次の病院を探さねばならない。自宅復帰も難しい事情の人も多い。高齢者については、認知症の相談が家族からよせられる。相談室は適当と思われる病院等とコンタクトし、受入れ態勢をとっていく。

こうしていったん問題状況を解決してもしばらくするとまた次のステージで、相談の電話が入ってくる。在宅生活をどう可能にするか。福祉制度の利用、住宅改修、福祉用具の利用等の対応を図ることになる。

この相談事業は高齢人口の急激な増加と並行してますます増えている。

(次回に続く)